

北鮮の金鳳漢教授の経絡に関する学説の一端が、私の耳に入つたのは、昭和三十七年の初春だつたと思う。間もなく、日本大医学部の板橋の校舎で、東洋医学会の総会が開催された。私は、間中喜雄及び藤田六朗の両氏と、会期中、この内容を討議した結果、甚だ承服出来兼ねるもののように考えられ、爾来、極めてこの説に対して批判的立場を取つて来た。

丸山昌朗

一昨年秋、私は朝鮮医学社出版の「経絡系統に就て」を詳細に検討して、次のような結論を得た。

経絡の実体と称するボンハン管が、経絡そのものであれば、この走向が、経絡パターンと一致すべき証明を要する。しかしこの文書には、この証明は未載である。

ボンハン小体は、皮脂腺と甚だ近似している。中谷義雄氏は、良導点は、皮脂腺に相当していると言う、即ち、金教授のボンハン小体は、皮脂腺の誤認ではあるまいか。

または、藤田六朗氏の云う丘疹の退行性変性化したものであらうか？またボンハン管とは、淋巴管の病的なものではないのか？

鍼の響、間中氏提唱の二金属効果、また経脈流注が全く論じられてない。以上の諸点より、即ち我々が知り得ている経絡現象とは、どうも直接に結びつかない。甚だ納得の行かない学説としか受け取れなかつた。

しかし、昨年に到り、幡井教授、藤原講師等の追試の結果を知り、ボンハン小体、ボンハン管の実在性は承認するには到つたが、依然として、これと経絡の結びつき、特に、サンアル学説には、非常な疑問を懷いて来た。一体「サンアル」とは何であらう。

既知の細胞学から考えれば、ミトコンドリアと、染色体と甚だ相似しているようである。しかしこの二者の中の一つでもなく、またこれに該当するものは考え難い。全く了解に苦しむ問題であつた。

しかし、今回「経絡の世界」なる映画を一見して、全く私が今まで抱いていた諸疑問が的外れなもので、ここには、経絡に関する決定的な成果が要約されていて、どうにも反論の余地のないものであることを、いやと云うほど知らされたのであつた。

確かに、古典における経絡説の全貌と、金教授が中心となつて研究された成果を対照してみると、未だ、完全なる解答には接していない。しかしよく考えてみれば古典における経絡説の内容は、どこまでも臨床上から把握されたものであり、金教授の成績は、生物学的、組織学的に考究されたもので、位相を異にしているのである。

即ち我々が皮膚上に認め得る経絡現象なるものは、立体的な運動が射影された像に外ならないのであるから、古典的な経絡パターンと、組織学的なボンハン管の走向が一致する筈がないのである。また「サンアル」なるものは、既にアルトマンが云つて

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。
営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます

いるごとく生物の最小単位である「ミトコンドリア」に外ならなく、核中にあるのは、染色体その者であり、経脈中では「サンアル」である。かく解すると「サンアル」学説もまた容認されて来るのである。

ともかく北鮮の研究方法は、既知の自律神経学の立場から説明しようとする等の安易な方法ではなく、全く革命的なもので、それだけ、至難の途を歩んだことが想像される。

藤田六朗氏も、丘疹点から発想し、この丘疹を経穴なりと断定している。これは全く正しい。しかし組織学的追究がもう一步足りなかつた。氏にとつては、全く無念な一言に尽きるものであらう。今、氏の著を読み返えして、その努力に敬服し、また、石井陶白氏の着眼にも、敬服させられるのである。

結論を云えば、我々の努力は、全く個人的なものであり、また交流が尠なすぎた。これに反して、北鮮では、国家総力の集中があるのであるから、この勝負は、全く問題にならないのである。今後は、速やかに金教授の説を全面的に承認して、微力ながらも、その発展に大いに参加して行くべきであらう。この経絡医学の完成から、真の

鍼灸医学と、漢方のルネッサンスが招来されることを信じて疑わぬものである。

(東京新宿区若葉町三ノ一〇)

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。
営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます